

ダイバーシティ・オンラインカフェ 開催報告

分野を超えた女性研究者同士の交流、若手研究者や、研究職に関心のある学部生に向けたロールモデルの発信を目的に、女性研究者が自由に語り合うオンラインカフェを開催しました。

【日時】令和4年8月7日（月）15：00-16：00

【場所】Zoom

【参加者】6名

【内容】学生への指導のしかた、コミュニケーションのとりかた、授業の工夫など、教育面での経験について、2人の話題提供者からお話ししていただき、参加者と自由に語り合う。

【話題提供者】

医療教育開発センター 松島加代子教授

人文社会科学域（多文化社会学系） 細田尚美准教授



【開催内容】

まず、司会からこれまでオンラインカフェの参加者から、取り上げてもらいたいテーマとして、学生との関わりや他の先生の教育実践について話を聞きたいという声があがっていたので、今回、教員どうして学生との関わりや教育実践について語り合う会を開催することになったという経緯を説明しました。続いて、参加者全員で、自分の研究テーマや、今日参加した理由などについて、自己紹介を行った。話題提供者の松島先生と細田先生からは、少し長めの自己紹介をしていただき、学生との関わりで思い出に残っていることについてもお話ししていただきました。

話題提供者の2人からは、学生との関わりで、特に進路についての相談での対応について、お話を伺いました。松島先生の場合は、学部生だけではなく、研修医の進路やキャリア相談にのっており、どのような診療科や病院で働きたいかだけではなく、結婚・妊娠・出産・育児に関わるライフイベントとキャリア形成に関わる相談に応じている一方で、細田先生の場合には、将来どのような仕事に就きたいかが決まっていない学生たちの進路を一緒に考えていくお話をしていただきました。お二人に共通していたのは、先生一人で抱え込まずに、他にもっと詳しい先生につなぐことや、学生たちが色々な経験ができるよう機会や情報を提供することなど、学生自身の視野を広げるサポートをしている点でした。また、松島先生からは、学生自身が自分なりの速度を大事にして悩み考えられることが大事という指摘がありました。参加者からは、こうしたお話を聞きながら、学生時自身がまず何のために大学にいるのかという意味をつかむことができることの大切さに気付いたという発言がありました。

また、参加者から、留学生が多い研究室でどのように文化的なギャップを感じない研究室をつくったら良いかという質問がありました。細田先生からは、授業だけではなく、研修やフィールド・ワークなどで、学生たちが自分の力や役割を発揮できるような機会を設けている取組をお話していただいたり、松島先生方は、学生自身が不安や思いを表出できるさまざまなタイミングをつくったり、教員自身も一人でそれを抱え込まないような仕組みが必要であることなど、実際に取り組んでいる方法なども挙げながらお話していただきました。また、他の参加者からは、質問者に対して「“ふつうの” 研究室というのではない。あなたらしい研究室をつくってほしいのでは」という声かけがあり、質問者がその言葉に励まされたという場面もありました。

1時間はあっという間でしたが、学生との関わりの中での不安や悩みを率直に聴き合ったり、お互いの工夫していることを共有し合ったりすることができました。多様な学生たちが集まる大学において、その多様性を尊重し、学生たちが安心して学べる場をどのように作っていくのかという重要な課題も提起されました。また第2回の開催も検討していきたいと考えています。今後も、女性研究者どうしが互いにつながりあい、研究力を高め合う機会をつくっていききたいと思います。

【参加者からの声】

- また第2回を開催してほしい。
- 先生方からすぐにやってみようと思うアドバイスをいただけた。また、なんでも聞くという色々なチャンネルが必要だときいたが、私にとってダイバーシティ推進センターがそういうチャンネルだと思った。
- 学生自身が多様な中で、どのように関わっていったらよいか、お話を通して考えることができた。
- もっと皆さんからお話を聞きたいと思った。学生たちが、どんなことでも学びにつなげていけるよう、学生たちにしっかり伝えたり、そのような場が必要だと思ったので、具体的に考えていきたい。
- 大学の教員は、学生の接し方について学んできているわけではないので、こういう場が重要だと思った。